

# 中日ニュース

シネスコ版

有P

No. 278

1.

漁獲量八万五千トン

10

五月十三日、今年のサケ・マス漁獲量をめぐる日ソ交渉は八万五千トンで妥結し、日本側藤田、ソ連側モイセイエフ両団長の手で調印式が行われました。今年の交渉がはじめられたのは一月十二日、日本側十六万五千トンに対し、ソ連側は漁業資源保存をたてに五万トンを主張、大きな開きのまま百二十日間、漁業基地の函館港では、早くから全船団が勢ぞろいしていました。漁業基地の函館港では、早くから全船団が勢ぞろいしていましたが、進まぬ交渉に漁師たちは「一魚が逃げてしまふ」といたたまれぬおもいの毎日を送っていました。

こうした矢先だけに妥結のしらせをきいて大喜び。家族に見送られながら北洋へと元気に出発してゆきました。

2.

遭難シーズンを迎えて

残雪の美しいゴールドデンウィークの山々は、今年も登山者で大変な賑いぶりでした。

しかし、このブームの影に遭難の惨事があいつぎ、五月はじめの四日間に死者十八名をかぞえるという悲しい記録を作りました。

そしてしらせを聞いてかけつけた遺族が、遺骨を胸にほうぜんと帰つて来る姿は涙をさそいました。

一方、地元の警察も遭難には頭痛はちまき。山岳地長野県警察は警官を大動員して日本ではじめての遭難救助訓練にのりだしました。

本格的な登山シーズンも目近。豪雨をついての懸命な訓練が急峻な雪溪の上でつづけられていました。

3.

日本の群像  
立ちあがる

農村のお母さん

10

日本の農村地方のお母さんたちは、いまなお残存する封建の遺制の中で、まならぬ生活を送っています。

ここ岩手県下閉伊郡一帯は日本のチベットと言われているように、耕すにも平地なく斜面を身を粉にして、農婦たちが切り開いています。炭焼きのほか、現金収入はなく、主食は、ひえと麦とのそまつな雑炊です。

いつ果てることもないきびしい生活の重荷は、農村の女たちの宿命としてつきまとつてきました。

しかし、同じチベット地帯でも開拓部落の人達は、努力のかいあつて新生活を始めました。それはタマゴ貯金です。そして、たまつたお金でパン焼き釜を完成しました。

パン食を実行することにより米のとれない開拓地の悩みを解決したのです。こうして永い貧困と忍従の中から一步一步お母さんたちは前進していくことと

高村 二三  
道新 二八

不況のやまの表情

171

788

284

252

187